

大阪工業大学工学部 学生員○伊藤 洋平
大阪工業大学工学部 佐藤 進介
大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. 背景と目的

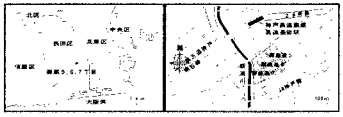
阪神大震災から7年が経ち、甚大な被害を受けた地区では、失われた住宅の再建や地域社会の再構築に取り組む、以前の生活を取り戻しつつある。しかし、個別具体的にみると、区画整理事業がその方式や住民の知識の程度などにより必ずしも期待通りに進まないなど以前の生活を取り戻せない住民も多い。特に被害の大きかった神戸市長田区では、未だ都市計画事業が途中段階にあり、既存住民と新住民との混在化も相俟って市街地と地域社会の両面において再建途上にある所も多い。こうした中で住民の都市計画への理解と参加を助けたり生活活動を支援するなどの地元組織（ボランティア団体や自治組織）を地区主導で立ち上げ、具体的に事業を展開することにより、震災前の生活と地域社会を取り戻す動きがみられる。本研究では、長田区御蔵通5,6,7丁目（以下、御蔵地区；図一1）を取り上げ、ボランティア団体の形成過程と活動の実態についてその特性を明らかにする。

2. 震災前後の御蔵地区の変化

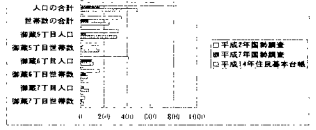
現在、御蔵地区は面積約52,500㎡、人口487人、世帯数245世帯の地区である。震災による被害は、焼失面積約22,000㎡、犠牲者は30人（23世帯）に及んだ。震災後に見られるように御蔵地区全体の人口と世帯数は減少している（図一2）。また、御蔵地区では震災後65歳以上の人口が大きく増加し高齢化が著しい（図一3）。これは復興公営住宅に高齢者を優先的に入居させた事によるものである。なお、5丁目の人口と世帯数は震災前の水準に戻っているが、これは復興公営住宅居住者〔約170人（80世帯）で約130人が他地区からの移住〕である。御蔵地区は、震災前は長屋、ケミカルシューズ等の工場、飲食店、商店などが混在する住工商混在地区であり、近所での助け合いが日常生活の中で行なわれていた。しかし、区画整理事業が長引いていることなどにより、住民や工場等が復帰出来ない場合が多く、復興が期待どおりに進まず、先に述べた5丁目に代表されるようにコミュニティの再生も大きな課題となっている（図一4）。

3. 震災から現在までのボランティアの形成過程と活動

現在、地区コミュニティの形成に大きな役割を果たしている地域主導のボランティア団体は、「プラザ5」と「まち・コミュニケーション」の2つである。この2団体のうち主として都市計画への参加の誘導支援を行っている「まち・コミュニケーション」は、他地区の団体である「ピースポート」と「曹洞宗国際ボランティア会（以下、SVA）」の協力により創設された。この「まち・コミュニケーション」は、都市計画以外に必要であったふれあい活動というソフトな分野の事業を手がける必要性を強く認識し、これを主に担うもう1つの団体「プラザ5」を創設した。これら2団体と「まち・コミュニケーション」の創設に関わった2団体の概要を表一に示す。「まち・コミュニケーション」は、教授



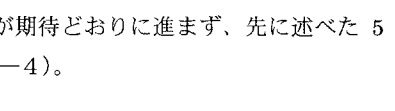
図一 御蔵地区の位置



図二 御蔵地区の人口と世帯数の変化



図三 御蔵地区の年齢層



図四 店舗数の変化

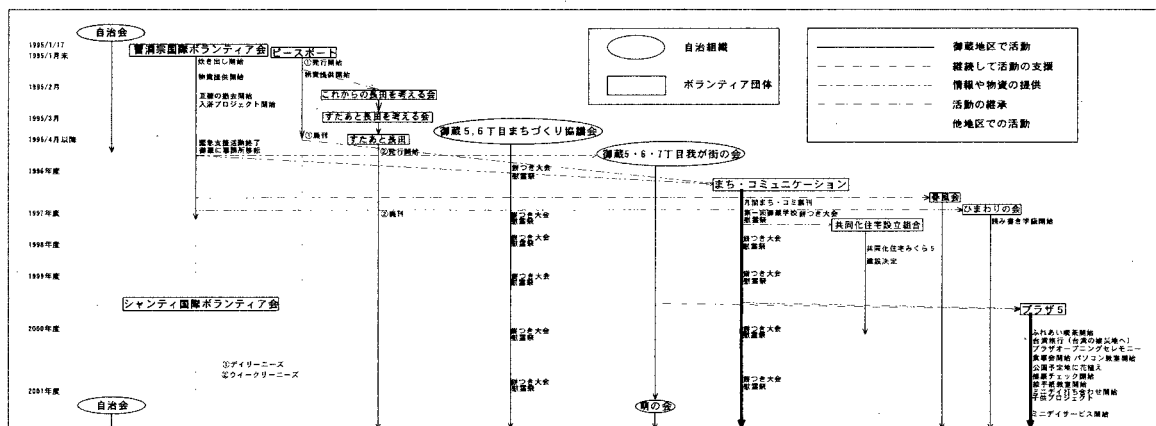
表一 御蔵地区における主要なボランティア団体の概要

名称	対象	概要	活動の動機	活動内容
御蔵地区の団体 「プラザ5」	長田区御蔵 原地区の 地域住民	活動時期 99年6月にプラザ5の地域の交流 スペースを作ろうと考えられ、99年9月に地域 をめぐって新たな団体として結成 活動拠点 みくら5の1階 活動団体 運営委員15人、登録ボランティア 25人24人	まちを支援するにあたり、まち・コミュニケーションでは かへしきれない活動を継続してまちを支援するため に、住民が集まる場を築く必要があると考えられ る5丁目の完成に合わせて、運営委員会を作った。	委員会、ふれあい喫茶、区画整理事業、パ ソコン教室、ミニサークル、健康 チェック、委員会、コンサート、健康・運 転・介護の勉強会、公園予定地での野 菜・花づくり、子供プロジェクト、他地区 からの住民の受け入れ
まち・コミュニケーション	長田区御蔵 5,6丁目の 地域住民	活動時期 99年4月から 活動拠点 コンテナ 活動団体 まち4人、事務局・教団10人 その他他地区の人を含む20人	御蔵地区の4割以上が焼失したため、ボランティアの 助けが必要だと田中さん、小野さん（ピースポート）、 小野さん（SVA）の3人の共通意識であった。そこ で住民の結びつきを支援するために結成した。	まちづくり協議会の書記、区画整理事業 の勉強会、懇話会、餅つき大会、課 外読書の手伝い、イベント支援、プラザの 開館、まちづくりの推進
ピースポート	他地区の人々	活動時期 1995年1月まで 活動拠点 御蔵地区のボランティア村 活動団体 約15人 終了時期 97年4月 活動内容 御蔵地区のボランティア村	震災直後御蔵地区の復興支援に活動するにあたり、 被災者支援の中心の呼びかけがあり、復興の支援に活動する ことになる。	被災者支援の中心の呼びかけがあり、復興の支援に活動する ことになる。
ボランティア（復興ボランティア会） （SVA）、曹洞宗国際ボ ランティア会	被災者への 支援や生活 の向上	活動時期 1995年1月 終了時期 97年4月 活動内容 御蔵地区のボランティア村	震災直後御蔵地区の復興支援に活動するにあたり、 被災者支援の中心の呼びかけがあり、復興の支援に活動する ことになる。	被災者支援の中心の呼びかけがあり、復興の支援に活動する ことになる。

参考：まち・コミュニケーションの形成に関係のある団体

Yohei ITO, Shinsuke SATO, Yoshikazu IWASAKI

まち・コミュニケーション」は、教授
や専門家を中心に区画整理事業の
勉強会、まちづくり協議会の支援な
どを行い、「プラザ5」は、ふれあ
い喫茶や食事会などの住民にとっ
て身近な活動を行っている。



震災後、御蔵地区に関わった団体は自治組織 3 団体、ボランティア団体 8 団体、計 11 団体である。その中で役割を終えた団体は 3 団体、現在も御蔵地区と関わりを持って活動している地元組織は 8 団体である。「ピースボート」と「SVA」は先述の主要な 2 ボランティア団体のほかにも「ピースボート」は「すたあと長田」に、「SVA」は「春風会」「ひまわりの会」「御蔵 5,6,7 丁目我が街の会」に創設の段階で関わった（図－5）。こうした誕生をみた地元組織は、相互に連携をもちながら 7 年間の各期の要求に答えてきた。これらボランティア団体などの関わり方の変遷を示した（図－6）。この図からも理解出来るように、情報と人材を機軸とした連携が進められており、現在はこの連携により再浮上してきた元の自治会を中心として、組織間の有機的連携が形成されてきた。